

“カルト”問題に直面した家族の心理的プロセスの研究 —曖昧な喪失に対する家族の反応—¹⁾

中西彩之*・西田公昭**

A Study of Psychological Processes of Families who Faced “Cult” Problem:
Family’s Reaction to Ambiguous Loss

Ayano NAKANISHI* and Kimiaki NISHIDA**

The purpose of this study was to examine the psychological processes of families whose members have joined destructive cults and to comprehensively understand the families from the viewpoint of the Ambiguous Loss Theory. Semi-structured interviews were conducted with 17 families. As a results, the psychological processes of families was organized from the viewpoint of interaction between the family and the said person, and it is inferred that the process goes through the stage of awaring the said person’s involvement of the cult, and the stage of deteriorating the family relationship. This research also inferred that each stages affect each other with the negative experience caused by cult involvement. In addition, this research found that families have suffered with cult problems had experienced ambiguous loss. Up to the present, an ambiguous loss have been categorized into two types; however, based on the results of this research, using continuous indicators of “clear - unclear” rather than binary of “present / absent” is expected to be able to flexibly understand the current state of ambiguous loss.

key words: destructive cult, family stress, ambiguous loss, qualitative approach, mind-control

社会には、自らの利益追求のためにあからさまな欺瞞を行い、人権を侵害している集団がある(西田, 1998)。そのような集団は破壊的カルト(destructive cult)と呼ばれ(以下、カルトと省略)、集団のトップリーダーや上位メンバーは、組織の目的成就のために、メンバーの認知、感情および行動を一時的ある

いは永続的に操作する「マインド・コントロール(mind control)」と呼ばれる心理操作を用いて、メンバーを管理していることが多い(西田・黒田, 2003)。先行研究では、カルトが用いる心理操作の手法や(西田, 1993; 1995; 2001)、脱会後の解離症状などの元メンバーの心理的問題が明らかにされている

¹⁾ 本研究の趣旨をご理解下さり、ご協力いただきました関係者の皆さまに深く御礼申し上げます。特に、カルト問題に直面したご家族の皆さまには多くのご示唆をいただきました。最後に、論文の執筆にあたり、立正大学の高橋尚也准教授に有益なご助言をいただきました。ここに記して、厚く御礼申し上げます。

* 無所属

Freelance

** 立正大学心理学部

Faculty of Psychology, Rissho University, 4-2-16 Osaki, Shinagawa-ku, Tokyo 141-8602, Japan

(Spero, 1982; Conway & Siegelman, 1982; Wright, 1991; Swartling & Swartling, 1992; Martin, Langone, Dole, & Wiltrout, 1992; Gasde & Block, 1998; 西田・黒田, 2003)。

カルト問題における関心の1つが、メンバーの家族についてである。しばしば、メンバーの家庭環境は、機能不全的であると指摘され、カルト関与の原因として説明されてきた(Deutsch, 1975; Schwartz & Kaslow, 1979; Deutsch & Miller, 1983; Curtis & Curtis, 1993)。しかし実際には、多くのカルトメンバーが、特にトラブルを抱えていない標準的な家庭の出身であることが明らかにされており(Singer, 1979; Clark, 1979; Goldberg & Goldberg, 1982)、メンバーの家庭環境は、カルト関与の原因というよりも、きっかけの1つであるといえる。

臨床心理的カウンセラーや聖職者などのカルト問題に携わる専門家は、特定の家族メンバーがカルトに関与することで家族が直面する問題についていくつか報告している。貫名(2009)は、カルトの“教え込み”を受けた当人と家族が、しばしば激しい論争や衝突に発展して日常生活に支障を来していることを指摘している。また、ある家族メンバーが「献身」や「出家」などをした場合、当人の家族は、その者の居場所や安否すら把握できなくなることもある(Keiser & Keiser, 1987 マインド・コントロール問題研究会訳 1995; オウム真理教信徒救済ネットワーク, 1995; 紀藤, 2012)。以上のことは、家族や元メンバーへの調査で明らかにされている(Swartling & Swartling, 1992; 西田, 1995; Sullivan, 1984)。つまり、家族にとって当人のカルト関与は喪失体験に近い経験といえ(志村, 1999), Henry(2012)は、カルト問題を抱える家族の悲嘆に対して、「喪失体験であってもそれを表明できず、社会的に認めてもらえない“公認されない悲嘆 (disenfranchised grief)”」であると主張している。なぜなら、カルト関与した当人は、被害者になるだけでなく、他者を勧誘したり、犯罪行為に加担したりすることで加害者にもなりうるからである。そのため、家族は周囲に打ち明けることができない(杉本・名古屋青春を返せ訴訟弁護団, 1993)。また、公的な相談窓口に相談しても、“被害”が必ずしも法的な意味での被害とは認定されないため(楠山・貫名, 2000)、サポートが得られにくい。このような苦悩は、家族の手記からも伺

え(Zivi, 1995; 林, 2000; 日本脱カルト協会(JSCPR), 2009; 鈴木, 2012)、カルト問題の研究は、当人だけではなく、家族にも焦点を当てる必要があるといえる。

Beckford(1982)は、面接調査から家族の反応を3つに分類した。1つ目は、カルト関与は当人の決断である信じ、無力感や諦念感を持つ“無理解”のパターン、2つ目は、団体による当人への心理的操作があると考え“怒り”を示すパターン、3つ目は、カルト関与をめぐる一連の状況が理解できず、判断を保留しつつ諦める“アンビバレンス”な反応を示すパターンである。また、その背景として、知識や情報不足、当人とコミュニケーションが取れないこと、当人の関与のプロセスが不可視的であることを指摘している。また、Goldberg & Goldberg(1989)は、臨床医としての経験から、家族の辿るプロセスを4つの段階に整理している。1つ目は、当人のカルト関与に気づかない、信じようとしないう段階、2つ目は、当人のカルト関与を認識し、悲しみや恐れを抱く段階、3つ目は、カルトに関する情報収集などを行う段階、そして4つ目は、家族が臨床医のサポートを受けて、カルト問題に対して何らかの行動を取る段階である。なお、Ross & Langone(1988 多賀 訳 1995)やAgustin(2011)も同様の指摘をしている。

以上のように、先行研究では家族の反応やプロセスの一側面が明らかにされているが、Beckford(1982)の研究では、家族の現在の反応のみを分析しているため、反応の推移や変化については検討されていない。Goldberg & Goldberg(1989)の研究においても、プロセスの理論的枠組みはあるものの、その詳細な過程は明確ではない。そのため、家族が直面する問題や心理的背景の検討は、まだまだ不十分といえる。

先述したように、カルト問題に直面した家族は、“公認されない悲嘆”を抱えていると推測される。そこで、本研究では、Boss(1999 南山訳 2005)の提唱する“曖昧な喪失 (ambiguous loss)”理論に着目する。曖昧な喪失とは、家族システムにおいて、1人の家族成員の身体的あるいは心理的存在/不在に関して曖昧性がある喪失と定義される(Boss, 1999 南山訳 2005)。曖昧な喪失には2つの類型があり、第1のタイプは、身体的には不在であるが心理的には存在していると認識されることで生じる喪失で、地

震や津波や誘拐などによる行方不明、失踪などが含まれる。第2のタイプは、身体的に存在しているが、心理的には不在であると認識されることで生じる喪失で、認知症、依存症などが含まれる。南山(2003)は、Boss(1999 南山訳 2005)の主張を以下の5つに整理している(以下、連番は筆者による)。曖昧な喪失状態にある家族は、1)喪失が一時的なものか永続的なものかが曖昧なため、状況を理解したり問題解決ができなくなり、2)喪失対象である本人がまだ家族の一員として“いる”か“いない”かに関する反応が両極端になりやすく、3)家族関係の役割や規則が、喪失以前の状態のままで凍結し、4)その状態が持続することで、家族にアンビバレンスな反応(例えば「愛情」/「憎悪」)が生じる。そして5)周囲の人はそのような家族を喪失状態にあるとはみなさないため、サポートを与えるよりはむしろ拒絶する傾向がある。

曖昧な喪失の特徴をカルト問題に直面した家族に照らしてみると、カルト関与した本人との情緒的交流が断たれた家族は、第2のタイプの心理的な不在を経験していることが推測される。そのため、曖昧な喪失理論は、カルト問題に直面した家族に生じる諸問題の背景を理解するために有用と考えられる。また、「出家」や「献身」などによって本人が失踪した場合には、Boss(1999 南山訳 2005)の2類型では説明しきれない、心身ともに存在が曖昧なために生じる新たなタイプの曖昧な喪失も経験しうると想定される。そこで本研究では、カルト²⁾問題に直面した家族に生じる問題や対処行動、心情などを含めたプロセスを明らかにすることを目的とし、曖昧な喪失の視点から家族の包括的な理解を試みる。

方 法

カルトに関与した家族メンバーを抱える家族の心理的プロセスの現状を多面的に理解するために、このような家族をフィールド観察³⁾することからはじめ、その後、以下のように面接法による調査を実施して現象の把握に努める。

1. 対象者

家族の中に、カルト的団体に関与している、あるいは以前関与していた者を1人以上持つ家族(自身は当該団体に関与したことがない者)に調査協力を依頼し、17名(夫婦面接を含め13ケース)が調査に参

加した。対象者の基本属性をTable 1に示す。

2. 実施法

筆者による半構造化面接法を用いた。面接は、対象者が指定する場所(大学、喫茶店、対象者の自宅など)で行った。面接実施前に、各対象者に対し研究の趣旨とプライバシー保護および結果の取り扱いに関する説明を行い、全員から同意書に署名を得た。録音の同意を得られた場合には機材に録音し、同意のない場合には、随時メモを取った。調査時間は1時間程度であった。

3. 時期

2013年4月7日-5月12日に実施した。

4. 内容⁴⁾

フィールド観察で得られた内容を参考に、調査項目を作成した。内容はおもに、①家族メンバーのカルト関与に気づいた時期に関する内容、②家族と本人の関係に関する内容、③本人のカルト関与によって生じた経験に関する内容であった(質問例。発覚後、〇〇さん(本人)とはどのようなやりとりをされましたか)。

5. 分析方法

本研究の分析は以下の手順で行った。まず、対象者の回答を、録音(あるいは書き起こした資料)をもとに筆者が文字データ化した(1次資料)。そして、1次資料の中から個人が特定されるような情報を除いた形の資料を作成した(2次資料)。この2次資料をもとに、筆者がデータを熟読し、カルト問題によって

²⁾本研究では、特定の団体をカルトと定義できるかどうかの議論は避け、当事者である家族が、ある団体への関与を“カルト関与”だとみなして憂慮していることに注目する。よって、本研究で用いるカルトという概念は、当事者の意思判断によってその論議をよんでいる団体をさす。

³⁾本研究におけるフィールド観察とは、カルトに関する自助グループへの参加を指す。自助グループは、カルト的であると指摘されることの多い団体のメンバーを身内に持つ家族や元メンバー、アドバイザー(カルトに関する専門的知識のある者)などによって構成されている。筆者の身分や研究の目的・趣旨を伝えた上で参加し、適宜メモをとったり、休憩時間などの合間に、個別の参加者に話を伺ったりした。4つの自助グループに、2012年4月から2013年12月にわたって参加し、調査時間は合計297時間であった。

⁴⁾本人のカルト関与以前から脱会後を含む現在までを聴取したが、面接内容は多岐にわたるため、本分析に用いた内容のみを記載する。

家族が直面する問題や対処行動, 心情に注目した。そこに関する発言内容をカテゴリーとして整理し, 上位のカテゴリーで括ることのできる場合には, 上位カテゴリーでまとめて分析を行った。

6. 倫理的配慮

対象者には, 自由意思による研究協力, 研究協力撤回の権利, 個人情報保護, 厳重なデータの取扱い, 結果の公表, インタビューの録音について説明し, 同意を得た。録音の同意が得られなかった場合には, 書き取りを行った。

結 果

整理したカテゴリーおよび発言例を Table 2 に示す。プライバシー保護のため, 発言例において, 団体名のような具体的な名称などに, 内容を損なわない程度に変更を加えた。以下, カテゴリーは<>, 上位カテゴリーは【】で示す。

1. 家族メンバーのカルト関与に気づく段階

家族がカルト関与を知った時期と, 実際に当人が関与しはじめた時期にブランクのある報告者が多く, <外出理由やお金の使い道を当人が偽っていた><聖書の勉強やサークル活動だと聞いていた><当人が夢中になっている“何か”程度にしか認識していなかった>ことが理由として挙げられた。多くの家族は, <当時はあまり意識しなかったが, 思い返せば当人の変化を感じる出来事があった>という。これら4つのカテゴリーは, 家族は, 当人の変化を感じても, 当人とカルトの接触が始まっていることに気がつかないと解釈され, 【カルト関与した家族メンバーの兆候の見落とし】として整理した。

当人のカルト関与を知ったきっかけとして, 部屋の片づけなどでたまたま当人の持ち物から団体関連のグッズを発見した>, または<突然, 入信した旨を告げられた><警察や学校からの連絡を受けて団体への関与を知った>ケースが多かった。これら3つのカテゴリーは, 家族は, 偶然あるいは当人のカルト接触から一定期間経った後に関与を知ることになると解釈され, 【偶発的, 事後報告的にカルト関与を知る】として整理した。

カルト関与を知った家族の初期の反応は, 団体についての知識があるか否かで, 異なっていた。メディアなどを通じて, 以前から団体の問題点や“あやしき”について知っていたケースでは, <団体について

知っていたので, 当人の関与を知って衝撃を受け, すぐに危機感を抱いた>という報告があった。一方, 大半のケースで, <団体のことをほとんど知らず, 関与を知ってもあまりピンと来なかった>という報告が挙がり, 入会金などを当人に頼まれた際に援助をしたという発言も得られた。その後は, <情報収集やトラブルの蓄積で, 徐々に団体への関与に危機感が芽生えた>という報告が多かったが, <この団体はおかしいと思っても, 相談機関を探したり情報探索まで気が回らず, 困惑した状態のまま何年も過ごした>というケースもあった。これら4つのカテゴリーは, 団体に関する情報を得ることで, 家族は当人の団体関与に危機感を持つと解釈され, 【知識獲得によりカルト関与に危機感を持つ】として整理した。

2. 家族と当人の関係が悪化する段階

家族メンバーのカルト関与に危機感を持った後でも, <今は熱中していても, すぐ飽きるだろうと思っていた><話し合えば, 団体のおかしさを理解するだろうと思っていた>ことが報告された。また, <公的機関などに相談すればすぐ解決すると思っていた>という報告もあった。「マインド・コントロール」という言葉は知っていたというケースも含み, 全ケースで<当人が「マインド・コントロール」のような心理操作の影響下にあるとは思ってもよらなかった>と報告された。現在の認知について尋ねたところ, 対象者全員が, 当人は団体からの心理操作を受けていた(受けている)と思うと回答した⁵⁾。これら4つのカテゴリーは, 家族が当人のカルト関与をすぐ解決できる事柄として捉えていたと解釈され, 【早期脱会への希望的観測】として整理した。

カルト関与を知った初期の当人と家族のやりとりとして, 全ケースで, 少なくとも1回は, <団体の教義の矛盾や反社会的な活動について指摘し, 納得させようとした><情に訴えかけたり責めたりして, 辞めさせようとした>と報告された。また, 団体の施設に当人が向かうのを阻止しようと<力づくでも引き留めようとした>という報告もあった。これら3つのカテゴリーは, 家族はとにかく当人を早く脱会させようと, 脱会のみ主眼を置いた対応を試みたと解釈され, 【当人の脱会のみ焦点を当てた対

⁵⁾本研究の対象者は, 自助グループの参加者であり, 面接調査時点において, 「カルト」や「マインド・コントロール」などの概念についての基本的な理解がされていた。

Table 1 半構造化面接調査の対象者の基本属性

ケース	対象者	性別	年齢	面接法	家族と 当人の 統柄	当 人 以 外 の 家 族 の 関 与	団 体	関 与 当 時 の 当 人 の 年 齢	関 与 当 時 の 当 人 の 所 属	関 与 当 時 の 居 住 形 態	関 与 が 始 ま っ た 時 期	関 与 期 間	現 在 の 当 人 の 状 況
1	1	男性	60代前半	夫婦面接	子ども	なし	A 団体	10代後半	大学生	同居	1990年代	3年	脱会済
	2	女性	60代後半										
2	3	女性	50代前半	個別面接	子ども	なし	A 団体	20代前半	会社員	別居	2000年代	2年	脱会済
3	4	男性	50代前半	個別面接	配偶者	あり	A 団体	20歳前後	社会人	同居	1980年代	24年	脱会済
4	5	男性	60代前半	個別面接	配偶者	なし	A 団体	20代後半	主婦	同居	1980年代	25年	脱会済
5	6	男性	70代前半	夫婦面接	子ども	なし	B 団体	10代後半	高校生	同居	1980年代	18年	脱会済
	7	女性	60代後半										
6	8	男性	70代後半	個別面接	子ども	なし	B 団体	30歳前後	会社員	別居	1990年代	15～18年	現役
7	9	女性	60代後半	個別面接	子ども	なし	B 団体	10代後半	大学生	同居	1980年代	3年	脱会済
8	10	女性	70代前半	個別面接	子ども	あり	C 団体	30代前半	主婦	別居	1990年代	17年	現役
9	11	男性	60代後半	個別面接	配偶者	あり	C 団体	30代前半	主婦	同居	1980年代	32年	現役
10	12	女性	40代後半	個別面接	配偶者	なし	C 団体	50代前半	会社員	同居	2000年代	半年～1年	脱会済
11	13	男性	50代前半	夫婦面接	子ども	なし	D 団体	20代前半	フリーター	同居	2000年代	2年	脱会済
	14	女性	50代前半										
12	15	男性	40代前半	夫婦面接	子ども	なし	D 団体	10代後半	高校生	同居	2010年代	2年	現役
	16	女性	40代前半										
13	17	女性	50代前半	個別面接	子ども	なし	E 団体	10代後半	大学生	同居	2000年代	8年	現役

応】として整理した。

多くの家族は、上記のやりとりの後も当人を脱会させようと、幾度も家族会議などの話し合いを行っていたが、その結果、ほとんどのケースで、＜口論が絶えなくなったり、最低限の会話以外ではできなくなったりして、当人との関係が非常に険悪になった＞と報告された。脱会要請に対する当人の反応については、“目がすわる”“マニュアルのような返し”“能面のよう”などと表現がされることが多く、会話も噛み合わないほど非常に強い反発であったという。また、配偶者がカルト関与したケースでは、＜家庭の雰囲気が悪くなった＞と報告された。さらに、脱

会要請を繰り返した結果、「出家」や「献身」などで＜当人が家を出て、居場所も安否も分からなくなった＞という報告も複数あった。これら3つのカテゴリーは、カルト関与を辞めさせようと当人に継続的に脱会要請を行った結果、当人との関係や家庭の雰囲気が悪くなったと解釈され、【家族関係の悪化】として整理した。なお、1ケースを除く12ケースにおいて、カルト関与以前の当人との関係は良好だったとの発言を得た。

本研究の対象者は全員、当人の脱会のための試みを継続的に行っていたが、脱会要請の失敗以降、＜当人と会話をするとき、“他人”として割り切ろうとし

Table 2 カテゴリーおよび発言例

分類基準	上位 カテゴリー	カテゴリー	発言例
家族メンバーのカルト関与に気づく段階	カルト関与した家族メンバーの兆候の見落とし	外出理由やお金の使い道を当人が偽っていた(ケース1, 2, 4, 6, 12) 聖書の勉強やサークル活動だと聞いていた(ケース1, 9, 10, 13)	最終的にその、大学の同級生と、卒論のテーマが一緒の人がいて、その人のアパートに泊まり込んで、一緒に勉強したいから、許してくれて言われて…(中略)…ところが、団体の施設に入ってたんですね。(ケース1) ま、とりあえず、その…哲学みたいなことを言うんですよ…人生について考える、何かそういうゼミサークルみたいなことを言って…(ケース13)
	偶発的、事後報告的にカルト関与を知る	当人が夢中になっている“何か”程度にしか認識していなかった(ケース3, 4, 5)	セミナーに来てくれとか言われると、何回か一緒に参加したことがある。そんなときも、何だこれ?という感じ。でも本人があればいいから、という認識だった。(ケース3)
		当時はあまり意識しなかったが、思い返せば当人の変化を感じる出来事があった(ケース2, 7, 11, 13)	で、なんかちょっと変な真面目っぽい話を…人は何のために生きるんだ、みたいな話を…してみたみたいで、なんか変な…こんな趣味あったんだと。(ケース13)
		当人の持ち物から団体関連のグッズを発見した(ケース2, 4, 6, 11, 13)	(当人の)カバンが開いており、中身がごちゃごちゃしてそうだったので、整理してやろうと見ると、教祖の写真や本や印鑑などが出てきた。(ケース2)
	知識獲得によりカルト関与に危機感を持つ	突然、入信した旨を告げられた(ケース7, 8, 10)	その日に初めて、C団体の信者になりたいって、C団体の洗礼を受けたいって、あの、街中を伝導している人みたいに、自分も伝導に行きたいって、その日に言われ…(ケース10)
		警察や学校からの連絡を受けて団体への関与を知った(ケース1, 12)	あの一、警察から電話があったんですよ。<いきなり警察から>そう。駅前で、強引な、勧誘…アンケート調査をしてたんですよ。うちの子が。それを、地域の人が警察に通報して、駅前交番の人たちが補導に行ったんだね。(ケース1)
		団体について知っていたので、当人の関与を知って衝撃を受け、すぐに危機感を抱いた(ケース1, 2, 6, 8, 10)	私が警察から電話を受けました。夜。で、おたくのお子さんはA団体に入ってますって、まず言われて。もう血の気が引きましたね。(ケース1)
団体のことをほとんど知らず、関与を知ってもあまりピンと来なかった(ケース3, 4, 5, 7, 9, 11, 12, 13)		で、そのときはまだ、ちょっとややこしそうな宗教団体だなとは思ってたけど…そういうやばいって言う雰囲気はあまり感じてなかった。(ケース11)	
早期脱会への希望的観測	情報収集やトラブルの蓄積で、徐々に団体への関与に危機感が芽生えた(ケース5, 7, 11, 12, 13)	調べれば調べるほど、だんだんサンカクがベケに近くなっていて、もうついにベケ、これはちょっとやばいなど。(ケース11)	
	この団体はおかしいと思っても、相談機関を探したり情報探索まで気が回らず、困惑した状態のまま何年も過ごした(ケース3, 4, 9)	何とかならないかなって結局、いや、何にもしないから何ともならないんだけど。まあある日突然何とかなる、ならないのかなって…。調べてもいないんだけど、何か方法はないのかなって、常に…まあ頭の中からは離れないっていう…(ケース4)	
	今は熱中していても、すぐ飽きるだろうと思っていた(ケース3, 7)	この問題に関して、(当人は)頑固、だいぶ頑固だった。でも、その頃は、すぐ覚めるだろうと思っていた。(ケース3)	
家族と当人の関係が悪化する段階	話し合えば、団体のおかしさを理解するだろうと思っていた(ケース10, 13)	で、一回脱会者に会わせてくれるって言って、そしたら辞めるだろうと思ったの、そのころはまだね…(中略)…一年くらいで皆やめるよ…ってはじめ言われて、一年様子みたら、辞めない…卒業するまでには辞めるよ…辞めない…就職したら辞めるよ…辞めない…(ケース13)	
	公的機関などに相談すればすぐ解決すると思っていた(ケース1, 3, 4)	その時は、相談に行けば、マニュアルとかがあり、専門家とか、弁護士がすぐやってくれて、トントンと進むと思っていた。しかし、実際には全然違った。(ケース3)	
	当人がマインド・コントロールのような心理操作の影響下にあるとは思ってもよらなかった(全ケース)	でもあの、マインド・コントロールっていう言葉自体なかったんですよ。洗脳って言うくらいだね。だから初めは、何でこう話ができないのかっていう、それが分からない。(ケース5)	

Table 2 カテゴリーおよび発言例 (続き)

分類基準	上位カテゴリー	カテゴリー	発言例
当人の脱会 のみに焦点 を当てた 対応		団体の教義の矛盾や反社会的な活動について指摘し、納得させようとした (ケース 4, 8, 9, 11, 13)	新聞にいろいろ、霊感商法が出たり、まあ新聞とか週刊誌に出たりしたので… (中略) …当時は週刊誌とか新聞を見せて、おかしから辞めなさいっていう話を…よくやってた…けども… (中略) …理屈でね、…議論しても…、分かり合える、ことにはならなかった… (ケース 4)
		情に訴えかけたり責めたりして、辞めさせようとした (ケース 1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 10, 11, 12, 13)	やり取りはね、大変でしたよ。喧嘩をして、もう勘当するとかね。だから、親子の縁を取るか、団体を取るか、二つに一つ、どちらを取るか、みたいな言い方をしたんです。 (ケース 1)
		力づくでも引き留めようとした (ケース 12, 13)	だから結局、私は辞めさせたいから、言うじゃないですか、行くなとか、でもうそのたびに殴り合いですよ…行くなって止めると暴れるんですよ…行きたいから…私は力づくで行かせまいとするでしょ、で向こうは力づくで行こうとするでしょ、で、殴り合い… (ケース 13)
家族関係の 悪化		口論が絶えなくなったり、最低限の会話以外はできなくなったりして、当人ととの関係が非常に険悪になった (ケース 3, 4, 5, 6, 7, 8, 9, 10, 12, 13)	口を開けば喧嘩になったり、まあ向こうはね、もう、あなたとお話しても無駄ですっていうしゃべり方をしてきて、他人行儀で。で、私としゃべるときは、もう能面のように、まったく顔色も変わらない、表情もないし、笑いもしないし、っていう感じでやって… (ケース 10)
		家庭の雰囲気が悪くなった (ケース 4)	結局、そういう…口論と、まあ…不満な、家庭の雰囲気になってしばらく…その繰り返し、をやってたってことですかね… (中略) …どうしても家の中の会話っていうか、空気は、その時期は…<悪く>悪くなって… (ケース 4)
		当人が家を出て、居場所も安否も分からなくなった (ケース 5, 6, 7)	出家状態っていうのは、居場所を知らされませんから… (中略) … (団体の施設の前で) 旗振ったり、みんなで声あげたりして、その…会合をやったわけです。そのときには、子どもにはもちろん会えません。 (ケース 5)
家族と当人の 関係が悪化する段階		早期脱会の困難さを実感してから の対応	だから、私はもう他人だと思ってるので、もう、自分の子どもじゃない、ひと呼吸おいて、考えながらしゃべらないと、(当人が) 口を閉じてしまうので… (中略) …世間話はもうできないです。 (ケース 12)
		団体の話題に触れることが怖く、できるだけ避けた (ケース 2)	(団体についての話題に) 触れなければ、今まで通りのコミュニケーションは取れていたんで、何か下手なことを言って、帰ってこなくなるのが怖かった。 (ケース 2)
		家族の中で、カルト問題に取り組む姿勢やモチベーションに落差が生じた (ケース 10, 13)	はじめのうちは、話してたんだけど、あまりにも(当人が) 分らず屋なんので、もう知らんほっとけ…そういうふうになるんです、男親は… (中略) …結局私はもう旦那に、この話はもうしたって仕方ないから、私は私で好きにするわと…そこですよね結局、夫婦で、話をするとかじゃなくて、お互いに、勝手にやりましょう状態に… (ケース 13)
		当人が自分自身で団体活動について考えられるよう、家族は疑問に思ったことを伝えたりする程度に留めた (ケース 5, 11)	だから、まともにもぶつからずに、そんなときはね、あなたのことは嫌いじゃないし好きなんですけど、D 団体は嫌いだって言い方をずとしてたんですね。… (中略) …その (D 団体の) お友達を否定してるんじゃないで、自分の子供を否定してるんじゃないで、D 団体を否定してる話なんで、D 団体から離れたら、それは構わないよという言い方で… (ケース 11)
		当人のことを否定したり精神的に追い込まないようなコミュニケーションを心掛けた (ケース 1, 2, 5, 11)	で、親のほうは、久しぶりの電話ですから、以前のように、コノヤロウバカヤロウは、やらないで。それで大事に話をしたわけですね… (中略) …あまりカルトの話はせずに、親子の話、だけにしていたわけですね。 (ケース 5)
家庭内が、辛いときに帰ってこられる、当人にとって居心地の良い場所にできるよう意識した (ケース 3, 8, 11)	いつかそれに自分が気がついて、ダメなことやってることに気が付いたときに、帰ってくるとちゃんと用意しとかないかと、これがもうこっちで出ていけて、もうお前は勘当だ出ていけってなってしまうと、帰るとこがなくなっちゃうと。 (ケース 11)		
家族と当人とのつながりが絶たれないよう、定期的に会いに行ったり連絡が取れるように努力した (ケース 5, 6, 8, 13)	でもやっぱり、関係修復するには、今までもわりかし、送ってたんですよ、あの、いろんなものをね… (中略) …果物も、サクランボや桃だっただけ出るじゃないですか、その都度こう、送ってたんですよ、このごろは待ってます。はははは。<でも、そういうの、積み重ね…>だと思います。 (ケース 8)		

Table 2 カテゴリーおよび発言例 (続き)

分類基準	上位 カテゴリー	カテゴリー	発言例
団体活動の 実践による 当人、家族、 他者を巻き こんだトラブ ルの発生		当人が他者を勧誘した (ケース 1, 5, 7, 11, 12, 13)	だから結局、学校で、2年になってからは、ダミーサークルで1年生を…同じことをやるの。(ケース 13)
		当人が友人などのカルト関与以前の対人関係を失った (ケース 5, 11, 12, 13)	せっかく同窓会で帰ったのに、勧誘して帰ってきちゃったんで…だから近所のお友達にも、うちの子がこうやってやってるってのがもう、そんなね、みんな…それでお友達もなくし… (ケース 11)
		当人が学校を停学・中退、進学や仕事を辞めた (ケース 5, 6, 7, 12)	(学校でのクラスメイトの勧誘) で、もう、停学になったんで、今度やったら退学なんです。だけど、どうもメールを見てると、ちょっと微妙だなーって。(ケース 12)
		団体への寄付などのために、当人が多額のお金を使い込んだり借金したりした (ケース 2, 3, 4, 7, 13)	今で言う、サラ金って言うんですかね、借金をして…しまったっていう… (中略) …もう最終…、月何十万も、返さなくちゃいけない… (ケース 4)
		当人の親、子供などの身内もカルト関与した (ケース 3, 8, 9)	子供たち、二、要するに二世、孫ですよ、二世の子たちが、やっぱりどんどんどんどんそういう考え方になっていくのは、私にとっても耐えられない。(ケース 8)
カルト問題 の継続によ って更に状 況が悪化す ることへの 不安	当人のカルト関与によって生じた負の経験	就職せずに団体活動を続けていたり、団体活動に専念するために仕事を辞めてしまうこと (ケース 11, 12, 13)	そう。だから結局、一番怖いのは、今もう仕事を辞めて、行くって言い出しちゃうのが怖い…。ふつうに仕事をして、で、自分で生活できる間は、辞めたら元に戻るじゃないですか、仕事もあるし… (ケース 13)
		合同結婚式や布教活動などで海外に行ってしまうこと (ケース 1, 2)	布教活動とかのため、「海外の人と結婚したい」と言われたときは、「えー、これでアフリカとか行かれたら…」と思った。でも、返答は「行っちゃったら、お母さんは悲しい」とだけ言った。もし本当に行っちゃってたら、私は自殺してたかも。(ケース 2)
		団体での信仰上の理由による輸血拒否 (ケース 8)	事故が起きた時が、やっぱり一番心配。病気はほら、なんだかんだそれなりにね… (中略) … (輸血拒否の教義を) ずっと信じてる人は、そのままだじゃないですか。(ケース 8)
		他者を団体に勧誘したり、反社会的な活動に加担したりすること (ケース 5, 7, 11, 12, 13)	誘ってほしくない…。なんで誘わなきゃいけないの? って言ったら、広めるためなんだよって言うんですけど…。広めてどうなるんだろかねって言うんだけど、広めて命が助かるんだよって言われました。(ケース 12)
		当人の一生が、カルトだけで終わってしまうこと (ケース 6, 11)	うーんだから、結局そうですね…そういうあれをずっと続けていると、もうそこにどっぷり浸かってしまって…ああもうこの子の人生はダメになるんじゃないかなと、そういう心配はしましたね。(ケース 11)
カルト問題 解決の不 確かさに 翻弄される		カルト問題がほかの家族に及ぼす影響 (ケース 8, 11, 12, 13)	んー…だから逆に、兄弟が手薄になってしまう。<他のご兄弟の対応…> 一番そっちが心配なんで… (中略) …あまり子供達にはあの子 (入信した当人) の話はしないようにしてます。(ケース 12)
		カルト問題が解決するのか、今後の見通しがまったくつかない (ケース 2, 5, 11, 12)	いわゆる保護者、未成年として、脱会できるのはそのチャンスしかないから、でも全然辞める気配がなく…親もどう探っていくのかわからなくて… (ケース 12)
		脱会への期待と、諦めの間での気持ちの揺らぎ (ケース 4, 6)	長くない間に辞めるんじゃないか? と期待したり、一方、ああい組織に入ること精神的に落ち着く人もいる。そういうタイプなのなら、このままどっぶりかもとも思う。(ケース 6)
		当人への愛情がある半面、怒りのような気持ち (ケース 3, 10, 12)	“何々してやってるのに” っていう、だんだん自分になってきて、それでもそれに対して、私の求めてる愛情をくれないから、またそこで怒りと悲しみと、ものすごい大きいものがまた私を襲って苦しめて。(ケース 10)
		脱会してほしいが、いつか、気づいてくれれば…という気持ち (ケース 6, 8, 13)	まあ、一番辞めてくれれば一番良っていうのが思うところだけど、でも、今のまんまでも… (中略) …辞めてほしいのが一番だけども、まあもう、私が死ぬまでに辞めないかもしれないし… (ケース 8)

Table 2 カテゴリーおよび発言例 (続き)

分類基準	上位カテゴリー	カテゴリー	発言例
当人のカルト関与によって生じた負の経験	カルト問題によるストレス症状	うつ病や情緒不安定などの精神的な症状 (ケース2, 8, 10, 12, 13)	私は (体調を崩) してますね。何かもう、鬱みたいですね。うん。<病院には行かれ…>一回行きましたが、睡眠薬みたいなのもらってきました。(ケース12)
		動悸, 耳鳴りなどの身体的な症状 (ケース2, 4, 5, 13)	私はもう, 眼圧が上がっちゃって… (中略) …もう…目が真っ赤になって出血して, 頭がふらふらになって。(ケース5)
	周囲や公共機関からのサポート	学校や警察など複数の機関に相談したが, 取り合ってもらえなかった (ケース5, 8, 11, 12)	もう, 学校では何もできませんと。先生も教務主任も, もう言わないでください, と言われました… (中略) …もうそれは学校では手に負えないから, もう学校には持ってこないでって言われてしまって, もうそれはお母さん自分でなんとかしてくださいって… (ケース12)
		周囲の人に相談しても, 理解してもらえなかった (ケース8, 10, 13)	やっぱり友達に相談しても, 真っ当な意見をくれるんですよ。でも要するに真っ当な話を通じないんだっていうことが分かってもらえない… (中略) …だから, 友達も, 「あんた, もういいわー」 みたいな, 「いつもその話いいわー」 みたいな。(ケース13)
		周囲の人には相談しなかった (ケース1, 3, 4, 5, 6, 9, 11)	あー, 変なプライドがあるでしょ, 会社生活だから, 弱みを, 同僚に弱みを見せられない, っていうかな。(ケース4)
	周囲に愚痴を言える人がいて, 状況を理解してもらえた (ケース2, 7, 8, 10, 12)	結構ね, 私オープンだから。実はこうこうでねって…職場の人たちにも<友人とか>うん, にも言っていましたし。身内にも話してるし, 隠さなかったし。(ケース7)	

た><団体の話題に触れることが怖く, できるだけ避けた>という報告があった。また, 報告者は当人のカルト関与を辞めさせようとする一方, 他の家族は消極的になるなど, <家族の中で, カルト問題に取り組む姿勢やモチベーションに落差が生じた>という報告もあった。また, 自助グループでカルト問題について学ぶことで, <当人が自分自身で団体活動について考えられるよう, 家族は疑問に思ったことを伝えたりする程度に留めた><当人のことを否定したり精神的に追い込まないようなコミュニケーションを心掛けた><家庭内が, 辛いときに帰ってこられる, 当人にとって居心地の良い場所にできるよう意識した>という報告があり, 脱会済の複数のケースが, 脱会のみでなく, 当人との信頼関係の修復に意識を向けるようになったことを当人の脱会要因として報告した。また, 当人が団体での共同生活のため家を出た時期のあるケースや, 離れて住んでいるケースでは, <家族と当人とのつながりが絶たれないよう, 定期的に会いに行ったり連絡が取れるように努力した>と報告された。これら7つのカテゴリーは, 家族が脱会要請の失敗やカルト問題について学ぶことで, 当人の早期脱会が困難であることを実感した上での対応に変化したと解釈され, 【早期脱会の困難さを実感してからの対応】として整理した。

3. 当人のカルト関与によって生じた負の経験

カルト関与後, <当人が他者を勧誘した>と多くのケースで報告された。具体的なトラブルとしては, 対人関係の悪化, 高校の停学, 警察への補導, 大学での偽装勧誘(団体名や実際の活動内容を告げずに, あるいは偽って勧誘すること)への加担が挙げられた。また, 団体活動に熱心になるにつれ, <当人が友人などのカルト関与以前の対人関係を失った>, <当人が学校を停学・中退, 進学や仕事を辞めた>という報告もあった。<団体への寄付などのために, 当人が多額のお金を使い込んだり借金したりした>ことも挙げられ, あるケースでは, 家族が代わりに返済するしかなかったという。さらに, 当人が家族を誘ったり, 団体活動と一緒に連れて行ったことで, <当人の親, 子供などの身内もカルト関与した>という報告もあった。これら5つのカテゴリーは, 勧誘や寄付などの団体活動の実践によって, カルト関与以前の当人の生活や人間関係に亀裂が生じ, 家族や他者をも巻き込む問題が発生したと解釈され, 【団体活動の実践による当人, 家族, 他者を巻きこんだトラブルの発生】として整理した。

カルト関与の継続で家族が不安なこととして, 当人が<就職せずに団体活動を続けていたり, 団体活動に専念するために仕事を辞めてしまうこと>

＜合同結婚式や布教活動などで海外に行ってしまうこと＞＜団体での信仰上の理由による輸血拒否＞＜他者を団体に勧誘したり、反社会的な活動に加入したりすること＞が報告された。また、他にももっと色々なことができたはずの＜当人の一生が、カルトだけで終わってしまうこと＞や、カルト問題への対応に追われ、ほかの家族のことが疎かになるなどの、＜カルト問題がほかの家族に及ぼす影響＞なども不安要素として挙げられた。これら6つのカテゴリーは、当人がカルト関与し続けることにより、当人や周囲の人間の状況が悪化していくことへの不安であると解釈され、【カルト問題の継続によって更に状況が悪化することへの不安】として整理した。

カルト問題が継続する中で、＜カルト問題が解決するのか、今後の見通しがまったくつかない＞という報告が複数挙げられた。また、＜脱会への期待と、諦めの間での気持ちの揺らぎ＞＜当人への愛情がある半面、怒りのような気持ち＞が報告された。当人が現役メンバーでカルト問題が長期化しているケースでは、＜脱会してほしいが、いつか、気づいてくれれば…という気持ち＞の報告がしばしば聞かれ、ため息や言葉の言い淀みなどの疲労を感じさせる含みがあった。これら4つのカテゴリーは、家族はカルト問題が解決するのかどうか分からない不確かな状況に振り回されると解釈され、【カルト問題解決の不確かさに翻弄される】として整理した。

報告者自身について、カルト問題継続による心身の症状として、＜うつ病や情緒不安定などの精神的な症状＞＜動悸、耳鳴りなどの身体的な症状＞が複数報告された。何人かは、通院して治療を行っており、当人の脱会後も完治せず治療を継続しているケースもあった。これら2つのカテゴリーは、カルト問題の継続によって報告者の心身にストレス症状が現れたと解釈され、【カルト問題によるストレス症状】として整理した。

本研究の対象者は、相談機関などからの紹介で自助グループに辿りついた家族が多かったが、＜学校や警察など複数の機関に相談したが、取り合ってもらえなかった＞という報告が複数挙がり、“家族で解決すべき問題”“信教の自由”を理由に断られたという。また、＜周囲の人に相談しても、理解してもらえなかった＞という報告もあった。＜周囲の人には相談しなかった＞という報告は半数以上あり、とりわ

け、男性は8名中7名が相談できなかったと報告した。理由として、恥や体裁、当人を変な目で見られるのが嫌だった、理解してもらえない、相談しても仕方ないと感じたという発言が得られた。一方、＜周囲に愚痴を言える人がいて、状況を理解してもらえた＞というケースも複数あり、精神的支えになったという。なお、自助グループで、同じ境遇の人たちと気持ちを分かち合い、その経験から、周囲の人にも最近は言えるようになったという発言も得られた。これら4つのカテゴリーは、家族はカルト問題についてなかなかサポートを得られないが、得られた場合には精神的支えとなると解釈され、【周囲や公共機関からのサポート】として整理した。

考 察

本研究では、カルト問題に直面した家族に生じる問題や対処行動、心情などを含めたプロセスを明らかにすることを目的として面接調査を行った。その結果、3つの分類基準が得られた。これら3つのうち、「家族メンバーのカルト関与に気づく段階」「家族と当人の関係が悪化する段階」は、家族と当人の相互作用の観点から整理でき、『家族と当人の関係』とした。「当人のカルト関与によって生じた負の経験」は、『負の経験』として整理した。その結果を、以下に考察する。

1. カルト問題に直面した家族の心理的プロセス

家族と当人の関係 家族メンバーのカルト関与に気づく段階では、家族ははじめ【カルト関与した家族メンバーの兆候の見落とし】をしており、後から、【偶発的、事後報告的にカルト関与を知る】。その後、【知識獲得によりカルト関与に危機感を持つ】ことが示唆された。この流れは全ケースで確認されたことから、カルト問題に直面した家族が関与に気づくまでに共通して辿るプロセスであると推察される。ただし、知識のない時点では家族は団体の是非の判断を保留する傾向があり、情報収集などを積極的に行わない場合、判断の保留期間が何年も続く場合がある。

家族と当人の関係が悪化する段階では、当人のカルト関与を知った家族ははじめ、【早期脱会への希望的観測】を持ち、【当人の脱会のみにも焦点を当てた対応】を行う。【当人の脱会のみにも焦点を当てた対応】で当人が脱会した場合には、家族の辿るプロセスはこ

ここで一旦終了することが予想される。ただし、本研究ではどのケースも該当せず、多くの場合、脱会要請と口論の繰り返しによる【家族関係の悪化】が生じた。家族は当初、カルトが用いる心理操作についての知識がなかった。その後もカルトの心理操作についての理解が十分でない場合、この過程は何度も繰り返され、【家族関係の悪化】はより複雑で深刻なものとなる。脱会要請の度重なる失敗、あるいはカルト問題について学ぶことにより、家族は最終的に【早期脱会の困難さを実感してからの対応】に収束する。

このように、家族と当人の関係は、家族が家族メンバーのカルト関与に気づく段階を経て、家族と当人の関係が悪化する段階に至る心理プロセスを辿ると推察される。

負の経験 当人のカルト関与によって生じた負の経験として、家族メンバーのカルト関与に気づく段階で、【団体活動の実践による当人、家族、他者を巻きこんだトラブルの発生】があった。これは、カルト問題の中でも具体的な被害として可視化しやすく、【偶発的、事後報告的にカルト関与を知る】きっかけや、家族が【知識獲得によりカルト関与に危機感を持つ】要因の一つとなった。また、このような具体的なトラブルは、家族に【カルト問題の継続によって更に状況が悪化することへの不安】を抱かせた。その結果、【早期脱会への希望的観測】を持つ家族は、早く当人を脱会させようと、【当人の脱会のみ」に焦点を当てた対応】を繰り返し行ったことが推察される。

家族と当人の関係が悪化する段階では、家族は【早期脱会の困難さを実感してからの対応】に移行するとともに、【カルト問題解決の不確かさに翻弄される】状況となる。家族は【家族関係の悪化】した中、【団体活動の実践による当人、家族、他者を巻きこんだトラブルの発生】【カルト問題の継続によって更に状況が悪化することへの不安】【カルト問題解決の不確かさに翻弄される】状況に置かれ続け、【カルト問題によるストレス症状】が促進される。とりわけ、【周囲や公共機関からのサポート】が得られない場合、家族はカルト問題を秘匿的に抱え続け、より深刻な状態になることが推察される。

このように、負の経験は、家族と当人の関係の各段階で相互に影響を及ぼしていると推察される。

2. 先行研究との理論的位置づけ

カルト問題と曖昧な喪失 本研究の結果から、カ

ルト問題に直面した多くの家族が、【当人の脱会のみ」に焦点を当てた対応】を繰り返し行い、【家族関係の悪化】を経験していたことが示唆された。脱会の困難さを実感した後は、家族内でカルト問題への取り組みに落差が生じたり、【カルト問題解決の不確かさに翻弄される】状態となり、【カルト問題によるストレス症状】を呈していた。【周囲や公共機関からのサポート】は、家族がカルト問題を隠そうとしたり、相談しても理解されなかったために、得られない場合も多かった。また、当人のカルト関与が何十年も継続し、カルト問題を抱え続けている家族もいた。南山(2003)は、曖昧な喪失の特徴に関する Boss (1999 南山訳 2005) の主張を、1) 状況理解や問題解決ができなくなり、2) 当人が“いる”か“いない”かに関する反応が両極端になり、3) 家族関係の役割や規則が喪失以前のまま凍結し、4) その状態の持続により家族にアンビバレンスな反応が生じ、5) 周囲の人はサポートを与えるよりはむしろ拒絶する傾向があると整理した。本研究の結果は、発言の少なさにより判断できなかった「家族関係の役割や規則の凍結」を除き、4つの特徴に該当していた。したがって、カルト問題に直面した家族は、当人の脱会可能性の不明瞭さによって曖昧な喪失状態にあるといえる。また、この喪失感は、家族関係の悪化に起因しているといえ、曖昧な喪失の2タイプのうち、第2のタイプの心理的な不在の経験が多いことが推察される。Boss (1999 南山訳 2005) は、家族が曖昧性を理解し、自らの喪失感を認めることの重要性を指摘している。カルト問題は長期的視野で捉える必要があり、家族が脱会可能性の曖昧さと共存していくことが重要となる。

本研究では、必ずしも従来の曖昧な喪失理論に合致するとは言い切れない点が2つ得られた。第1に、家族にとってカルト関与した当人は、常に別人のように豹変していた訳ではなく、完全に心理的な不在であるとは言い切れなかった。なぜなら、家族は、日常生活のこれまで通りの当人と、団体活動の関連で別人のように豹変する当人の、両方の面に接触していたからである。また、これが家族の状況認識が混乱する要因の一つであった。したがって、曖昧な喪失における心理的な不在は、不在そのものに曖昧性を伴うことが推定される。

第2に、本研究では、家族関係の悪化後、「出家」「献身」として当人の失踪を経験したケースがあった

が、これは、第1のタイプや第2のタイプの曖昧な喪失には当てはまらなないと考えられる。なぜなら、会いたくても会えない状況は、“地獄のよう”であったと報告される一方、その状況は、居場所が分からなくても、団体施設に居ることは分かっていたり、ふらっと一時的に帰ってくることもあったからである。つまり、カルト問題に直面した家族にとって、当人は心理的に“いる”“いない”が曖昧であり、身体的にも“いる”“いない”が曖昧であったといえ、新たなタイプの曖昧な喪失を経験していたと推察される。

これまで曖昧な喪失は、身体的な不在と心理的な存在による喪失、身体的な存在と心理的な不在による喪失の2タイプとして捉えられてきた。その背景として、曖昧な喪失理論が行方不明兵士の家族に関する研究に起源を持つ点を指摘できる (Boss, 1999 南山訳 2005)。行方不明兵士の家族にとって、当人は身体的には完全に“いない”、心理的には“いる”として捉えられ、その結果2種類の曖昧な喪失が提唱されてきた。しかし、本研究の結果を踏まえると、曖昧な喪失は、“いる/いない”の2値でなく、“明確-不明確”の連続的指標を用いて、二次元上で表現することが可能と考えられる。この表現を採用することで、曖昧な喪失の現状を柔軟に理解していくことができるかと期待される。

従来のカルト研究との理論的位置づけ 先行研究と本研究の結果を照らし合わせると、【カルト関与した家族メンバーの兆候の見落とし】は、先行研究で指摘された結果と同様であった (Ross & Langone, 1988 多賀訳 1995; Goldberg & Goldberg, 1989; 楠山・貫名, 2000)。また、Goldberg & Goldberg (1989) は、カルト関与を認識する段階と情報収集の段階を区分して整理したが、【知識獲得によりカルト関与に危機感を持つ】の結果から、家族が団体関与の是非を判断するには情報収集が重要といえ、カルト関与の認識と情報収集は密接に関連していると推察される。宮村 (1997) や楠山・貫名 (2000) は、多くの家族がカルト問題を家庭内だけで解決できると考えた結果、より深刻な事態に陥ることを指摘しているが、【早期脱会への希望的観測】の結果から、家族は見落とし期間における当人の変化を一時的なものとして捉え、カルトの心理操作を十分には理解していなかったことが、要因の一つとして指摘できる。また、戸田 (2009) は、カルト問題における家族と当人の対等

なコミュニケーションの重要性を指摘しているが、【早期脱会の困難さを実感してからの対応】で当人と信頼関係の再構築を目指す対応を行えたのは、自助グループでの学びによるカルト問題への理解が進んだ家族であった。したがって、脱会重視の視点から信頼関係重視への視点の移行は、カルト問題に対する家族の理解への支援が必要であると推察される。サポートの得られにくさについて、杉本・名古屋青春を返せ訴訟弁護団 (1993) や Goldberg and Goldberg (1989) が家族側の要因を、楠山・貫名 (2000) が社会側の要因を指摘しているが、【周囲や公共機関からのサポート】の結果では、同様の傾向が示唆された。特に、調査時点から数年前という比較的最近でも、学校や相談機関への相談を取り合ってもらえなかったという報告があり、カルト問題への理解や支援体制がまだ十分でないのが現状といえる。

3. 結論と今後の課題

本研究の結論は、カルト問題に直面した家族が、家族と当人の関係を主軸とした心理的プロセスを辿り、その各々の段階とそれに付随する負の経験が作用し合う重層構造を持つことである。

この結論に基づき、具体的に2つの示唆を挙げることができる。第1に、カルト問題は、当人のカルト関与を知った家族の初期対応が重要であり、家族は性急な脱会要請への衝動を抑え、当人と信頼関係を失わないコミュニケーションを維持する必要がある。なぜなら、本研究では、家族による“団体批判”を前面に出した脱会要請の繰り返して家族関係が悪化し、カルト問題がより深刻化していたことが示唆されたからである。第2に、家族へのサポートは、家族のカルト問題に関する理解の促進、当人と家族の信頼関係の再構築、脱会可能性の曖昧さとの共存への支援に重点を置く必要がある。なぜなら、脱会済の家族は、当人と信頼関係の修復を当人の脱会要因として挙げたが、そのような意識に変化したのは、カルト問題への理解が進んだ家族であったからである。したがって、脱会重視の視点から信頼関係重視への視点の移行は、カルト問題に対する家族の理解への支援が必要であるといえる。また、信頼関係の修復の試みを継続していても、当人のカルト関与が長期化している家族もあり、カルト問題は長期的視野で捉える必要がある。

最後に本研究の限界として、以下の2点が挙げら

れる。第1に、本研究は、回想でしか得られない内容などに想起バイアスが作用した可能性があり、知見が示唆や仮説にとどまっている点である。第2に、本研究の対象者が、自助グループと接点のある者に限られておりサンプルの代表性が担保されていないという制約もある。これらの限界点を解決するために、今後は、本研究の示唆や仮説をふまえて、できる限り範囲を拡大しカルト問題に直面した家族を対象に、定量的な検討を行うことが必要と考えられる。

引用文献

- Agustin, D. 2011 Family dynamics during a cult crisis. *ICSA Today*, **2**, 6-8.
- Beckford, J. A. 1982 A typology of family responses to a new religious movement. *Marriage & Family Review*, **4**, 41-55.
- Boss, P. 1999 *Ambiguous loss: learning to live with unresolved grief*. Cambridge, MA: Harvard University Press. (南山浩二 (訳) 2005「さよなら」のない別れ 別れのない「さよなら」—曖昧な喪失— 学文社).
- Clark, J. G. 1979 Cults. *Journal of the American Medical Association*, **242**, 279-281.
- Conway, F., & Siegelman, J. 1982 Information disease: Have cults created a new mental illness? *Science Digest*, **90**, 86-92.
- Curtis, J. M., & Curtis, M. J. 1993 Factors related to susceptibility and recruitment by cults. *Psychological Reports*, **73**, 451-460.
- Deutsch, A. 1975 Observations on a sidewalk ashram. *Archives of General Psychiatry*, **32**, 166-175.
- Deutsch, A., & Miller, M. J. 1983 A clinical study of four Unification Church members. *American Journal of Psychiatry*, **140**, 767-770.
- Gasde, I., & Block, R. A. 1998 Cult experience: psychological abuse, distress, personality characteristics, and changes in personal relationships. *Psychological Manipulation and Society*, **15**, 192-221.
- Goldberg, L., & Goldberg, W. 1982 Group work with former cultists. *Social Work*, **27**, 165-170.
- Goldberg, L., & Goldberg, W. 1989 Family responses to a young adult's cult membership and return. *Cultic Studies Journal*, **6**, 86-100.
- 林 俊宏 2000 エホバの証人引き裂かれた家族 わらび書房.
- Henry, R. 2012 How grief becomes disenfranchised when losing a child to a cult. ICSA Annual International Conference: Manipulation and Victimization. ([http://icsahome.com/infoserv_respond/by_author.as](http://icsahome.com/infoserv_respond/by_author.asp?Subject=How+Grief+Becomes+Disenfranchised+When+Losing+a+Child+to+a+Cult)
- p?Subject=How+Grief+Becomes+Disenfranchised+When+Losing+a+Child+to+a+Cult).
- Keiser, T. W., & Keiser, J. L. 1987 *The anatomy of illusion: religious cults and destructive persuasion*. Springfield, IL: Charles C. Thomas. (マインド・コントロール問題研究会 (訳) 1995 あやつられる心—破壊的カルトのマインド・コントロール— 福村出版).
- 紀藤正樹 2012 マインド・コントロール—2時間でいまがわかる!— アスコム.
- 楠山泰道・貫名英舜 2000 カルトから家族を守る 毎日新聞社.
- Martin, P. R., Langone, M. D., Dole, A. A., & Wiltrout, J. 1992 Post-cult symptoms as measured by the MCMI before and after residential treatment. *Cultic Studies Journal*, **9**, 219-249.
- 南山浩二 2003 ポーリン・ボス「曖昧な喪失」研究の検討—その理論の概要— 人文論集, **54**, 1-20.
- 宮村 俊 1997 8章 親は何を知るべきか—破壊的カルトとマインド・コントロール— マインド・コントロール研究所 (編) 親は何を知るべきか いのちのことは社 pp. 118-152.
- 日本脱カルト協会 (JSCPR) 2009 第2部第10章 家族の対応の実例1 必ず光が見えてくる 日本脱カルト協会 (JSCPR) (編) カルトからの脱会と回復のための手引き 遠見書房 pp. 152-157.
- 西田公昭 1993 ビリーフの形成と変化の機制についての研究 (3) —カルト・マインド・コントロールにみるビリーフ・システム変容過程— 社会心理学研究, **9**, 131-144.
- 西田公昭 1995 ビリーフの形成と変化の機制についての研究 (4) —カルト・マインド・コントロールにみるビリーフ・システムの強化・維持の分析— 社会心理学研究, **11**, 18-29.
- 西田公昭 1998 セレクション社会心理学 18「信じるころ」の科学—マインド・コントロールとビリーフ・システムの社会心理学— サイエンス社.
- 西田公昭 2001 オウム真理教の犯罪行動についての社会心理学的分析 社会心理学研究, **16**, 170-183.
- 西田公昭・黒田文月 2003 破壊的カルト脱会後の心理的問題についての検討: 脱会後の経過期間およびカウンセリングの効果 社会心理学研究, **18**, 192-203.
- 貫名英舜 2009 第2部第2章 コミュニケーションの回復から脱会へ向けて 日本脱カルト協会 (JSCPR) (編) カルトからの脱会と回復のための手引き 遠見書房 pp. 114-126.
- オウム真理教信徒救済ネットワーク 1995 マインドコントロールからの解放 三一書房.
- Ross, J. C., & Langone, M. D. 1988 *Cults: what parents should know*. Weston, Mass: American Family Foundation. (多賀幹子 (訳) 1995 カルト教団からわが子

- を守る法 朝日新聞社).
- Schwartz, L. L., & Kaslow, F. 1979 Religious cults, the individual, and the family. *Journal of marital and Family Therapy*, **5**, 15-26.
- 志村 真 1999 7章 家族のためのカウンセリング マインド・コントロール研究所(編) カルトで傷ついたあなたへ いのちのことは社 pp.166-196.
- Singer, M. 1979 Coming out of the cults. *Psychology Today*, **12**, 72-82.
- Spero, M. H. 1982 Psychotherapeutic Procedure with Religious Cult Devotees. *Journal of Nervous & Mental Disease*, **170**, 332-344.
- 杉本 誠・名古屋 『青春を返せ訴訟』弁護団 1993 統一教会信者を救え—杉本牧師の証言— 緑風出版.
- Sullivan, L. B. 1984 Family perspectives on involvements in new religious groups. *Cultic Studies Journal*, **1**, 79-102.
- 鈴木次郎 2012 カルト被害者の親として大学に望むこと 日本脱カルト協会会報, **18**, 13-21.
- Swartling, G., & Swartling, P. G. 1992 Psychiatric problems in ex-members of Word of Life. *Cultic Studies Journal*, **9**, 78-88.
- 戸田京子 2009 第2部第1章 大切な人と心を通じ合わせるために 日本脱カルト協会(JSCPR)(編) カルトからの脱会と回復のための手引き 遠見書房 pp.99-113.
- Wright, S. A. 1991 Reconceptualizing cult coercion and withdrawal: A comparative analysis of divorce and apostasy. *Social Forces*, **70**, 125-145.
- Zivi, P. 1995 マインド・コントロールからの脱出—統一教会信者たちのこころ— 恒友出版.

(受稿: 2017.11.15; 受理: 2018.11.24)
